



筑摩世界文學大系

66

ハーデ
モーイム

大 沢 衛 訳
上 田 勤



筑摩書房

筑摩世界文學大系 66

昭和四十八年六月十五日

初版第一刷発行

ハーディ モーム

訳者

大沢 勤衛
上田

発行者

井上 達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京二九二七六五一

振替口座東京四一―二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20666 (出版社) 4604

目次

ハーデイ

ダーバアヴィル家のテス

大沢 衛訳

5

モーム

お菓子と麦酒

上田 勤訳

275

トマス・ハーデイ研究

大澤 千衛訳

391

ケアリーとアッシェンデン

中川 敏訳

411

解説 (ハーデイ)

大沢 衛

415

(モーム)

行方 昭夫

424

年譜

430

ハ
ー
デ
イ

ダーバヴィル家のテス

— 純潔な女 —

……あわれ篤つきし名よ！ わが胸は
 褥となりて汝を宿さん。

— シェイクスピア

初版覚え書

次の物語のおもな部分は——書き改めたところもいささかあるが——もと「グラフィック」紙に載ったものであるけれども、とくに大人の読者によんでももらいたいと思って書いた他の諸章は、「フォートナイトリ・レビュー」および「ナショナル・オヴザヴァ」に、挿話役のスケッチとして現われた。この小説の幹と枝々をつなぎ合わせ、二年前に執筆した本来の姿のまま、完本としていま上梓できることに對して、それら定期刊行物の編集者や経営者に感謝のこたを呈せずにはいられない。

ひとつつけ加えておきたいことがある、——この物語は、一連の事実芸術的な形を与えよ

うとする試みであり、大まじめなつもりで世に送り出されるのだ、ということである。本書の意見や氣持については、この節の誰でもがひそかに考へ感じていることを、明らかに筆に書いてはたまらないと思つてゐるような、あまりにお上品ぶつた読者があるならば、わたしはそういう方にお願ひしたい、——どうか聖ジェロームの使いふるされた次の文を思い出してくださいと、——たとえ真相から憤慨が生まれようとも、真相の隠されるよりは憤慨の生まれるほうがましだ。

一八九一年十一月

T・H・

第五版以後への序

立役者としての彼女の役割にとつて致命的な出来事として、あるいはまた、少なくとも、彼女の企てや希望に實質上とどめを刺すような終末として、従来扱われてきたようなある出来事を経験したあとに、女主人公の大きい戦役が始まる、——そういう小説であるために、本書が世間に歡迎されるなどということは、公然たる因襲にまったく反することであつた。——そして、周知のような大詰めの持つ暗い側面について、いままでいわれたよりも以上のある事を、小説の形でいわねばならなかつたのだと主張するわたしに、世間が同意してくれるだらうなど思つてみることも、まったくでもない話であつ

た。しかしイギリスおよびアメリカの読者が『ダーバヴィル家のテス』を迎えてくれた反響的精神は、つぎのことを証しているともいえるやうか、——ただ掛け声のみ大きい社会の公式に、物語をきちんと当てはめたりなどせずに、無言の意見、声なき声、の線上に物語を据えてみようという計画が、——たとえ、ごらんのやうにむらで、へんばな出来栄えのなかで示されたとしても、——まんざら誤まつた計画ではないということ。

この反響に對して、わたしは感謝の念を表明せずにはいられないのである。そして、友情に渴えつつ、いたづらにそれを求めることあまりにしばしばであるような一つの世界で、——いや、故意の曲解ではないという待遇を受けることすら、親切を受けたと感ぜられるような一つの世界で、——そうした男女のありがたい読者諸君に、親しくお目にかかつて、握手を交わすことができないのはかえすがえすも残念である。そうした人たちのなかには、この話をとても氣前よく歡迎してくれた月評家たち——これが圧倒的に多いのだが——がある。かれらのことは、かれらが、ほかの人たちと同じように、わたしの叙述上の欠点を、かれらみずからの想像の直観で惜しみなくつくろつてくれたふしがいまにも多いことを示している。

それにもかかわらず、この小説のねらいは教訓を主とするものでもなく、社会の通念を破壊しようとするものでもなくて、風景の部分では

単に再現を事とし、^{イマジナリ}瞑想の部分では確信に充ちているよりもむしろ印象に充ちているほうがしばしばではあるのだけれども、題材に対しては処理に対しても、異議となえる人があとを絶たないのである。

そうしたなかでも厳しい部類の人たちは、芸術に適したテーマに関する良心的な意見の相違を主張し、本書の副題に用いた形容詞の観念を、文明の帰趨から生じた不自然な派生的な意味以外の意味と、結びつけえないことをぶちまけるのである。かれらはご自身のキリスト教のもっとも繊細な側面から提供される精神的な解釈はいうまでもなく、この語に対するあらゆる美学的な要請といっしょに、「自然界」における「純潔」の意味を無視している。

ほかの人たちは、この小説の具現する人生観は十九世紀末に流行した人生観にすぎず、もつと初期の、もっと単純な世代の人生観ではないという断定（「ねがわくば充分に基礎づけうる断定ならんことを——」と本質的に変わらぬ根拠にもとづいて、異論をとなえるのである。いったい小説というものは、一つの論議ではなくて、一つの印象であるということ——問題はその点で休止すべきだということ、——をくり返しのべておきたい。

この種の裁判官について、シルレルがゲーテに書いた手紙の一節を思い出すがよい——「かれらは一つの表現された世界のなかに、かれらみずからの観念のみを求め、當為の律を真実の

相よりも高く値踏みしています。論争の原因は、それゆえ、そもそもの第一の原理にひそんでいます。かれらを相手に了解をつけようとしても、それはまったく不可能でありましょう」またこれも書いてある、「だれかひとが、詩的な表現物を判断する際に、その内的な必然性と真実よりも、何か他の点を重要視しているなど、こちらが気づく瞬間から、もうわたしはその人を相手にしません」

初版への覚え書のなかで、これらのページにこもっているあれやこれやのことに辛抱できないようなお上品な人が現われることを、わたしはほめかしておいた。そういう人物がはたして現われたのである。上記の異論者たちのなかにまじって——ある場合にはかれは「こんな女の救済を単独に証明しうる」ところのあの批判的努力をわたしがおこなっていないために、この本を通読しようとして三度も果たせなかつたことにびっくり仰天したというし、もう一つの場合に、かれは、かなりの物語のなかに顔を出す悪魔の熊手とか下宿屋の肉切り用大型ナイフとか、恥かしい行為で購われたバラソルというような俗悪な品物に抗議を申し込んできた。またもう一つの場合には、彼は「不滅の神々」についての失礼な一句（終章）が用いられたのは嘆かわしい、というだけおらしい、たった三十分間クリスチャンになった一紳士であることがわかった。しかしその同じ生まれつきのお上品な気取りは、かれをして、著者に対してさ

も同情にたえないといわぬばかりに、「かれがひたすらかれの最良の小説をわれわれに与えようとしている」ことは感謝しきれないところだ、などと弁解させずにはおかなかったのである。この大批評家にわたしは受け合うことができる——神々——単数形だろろうが複数形だろろうが、問うところではない——神々に理不尽にも抗議を持ち出すということは、なにもかれの想像するような、わたしの原罪ではないのだと。——なるほどそれには何か地方的な起源があるかもしれない、もしもシェイクスピアが歴史の典拠となりうるものなら（——そこまではとても言い切れまいが——）、そういう罪はそもそも七王国（^{（英国アングロサクソン時代）}）の昔からすでに「ウェセックス」に持ち込まれていたということを、いくらかもお目にかけることができるだろう。現に『リア王』のなかのグロースター伯、別名ウェセックス王アイナ（^{（西サクソン朝の王、アイニのこと。サクソン時代）}）は、——

いたずら小僧に対するとんぼ同然だ、神々に対するわれわれは。

神々はなぐさみ半分にわれわれを殺すのだ。

（『リア王』四幕一場三六行）

といっているのである。

『テス』をいじくり廻した者たちのうち残る二、三は、たいいていの作者や読者なら喜んで忘れたと思うような予定された種類の連中であつた、

—— こういう事件にしたり顔に有罪判決をくだしてみせる自称文学拳闘家、—— 近代版「異教徒の鉄槌」(聖アウグスチヌスの異名)、—— 小手調べの半成功を後日の全面的成功から食いとめようといつも寝ずの番をしていて、明白な意味を曲解し、雄大な歴史的方法を実践するという美名のもとに、私的な人身攻撃を加える札付き下司のかんぐり屋、などだ。しかしながら、かれらにも前進すべき大義名分があり、守るべき権益があり、維持すべき伝統があるのかもしれない。そうしたもののなかには、世間の物ごとがいかにかれを打つかを書き記す単なる話し手が、べつに深い魂胆もなく見落していて、まったくの手落ちのために、それに突っかかるようになったこともふくまれているであろう。話し手はそれを攻撃しようなどとはつゆ思っていないのに。—— 何か束の間の知覚というようなもの、ひと時の夢のこのした置き土産というようなもの、もし全般的にこれを働かすとなったら、おそらく、地位とか利害とか夫婦子供とか、召使とか牡牛とか驢馬とか隣人とか、隣人の女房とかに關して、とても攻勢的な、なおざりにできぬほどの不便を惹き起こすことであろう。それゆえかれは雄々しくもかれの個性を出版社の鑑戸のかげに隠して、「恥を知れ!」と叫ぶ。それはど稠密に世界は混み合っているの、地位のなにかの変動は、もつともよく保証された前進ですらも、だれかの感情を害するわけだ。そのような変動はしばしば情にはじまり、そのよう

な情はときどき小説にはじまるのである。——

一八九二年七月

上記の控えはこの物語の初期の経歴のあいだにしたためたものであった。なにしろ、本書のいろいろの点が公私の活潑な批評を受けて、まだまざまざと感情を刺戟していたころのことである。それらのページは何かの記録になるかもしれないので、みだりに変えたりせず、当時したためたままにしておくが、今だったらたぶんあんなことは書けないだろう。この本がはじめて出版されて以来、経過した短い歳月のあいだにすら、そのような応酬を掻き起こした批評家たちのなかには、もう「沈黙の境へ降りて行てしまった」人々がある、—— まるで彼らのいい分もわたしのいい分ももろともに、果てしなく些細だったことを人に思い出させるかのよう

一八九五年一月

この小説の現在の版は、以前のどの版にもけっして載ったことのない三、四ページを含んでいる。一八九一年版序文で述べたように、離れなれに出た挿話のたぐいを集めて収めたときにも、これらの数ページは見のがされていたのである、—— もとの原稿にはちゃんと記されていたのに。—— それらは第十章中のことである。前に言及した副題については、次のことをい

い添えておいてよいと思う、—— あれは最後の

校正を読み終えた最後の瞬間になってつけ加えたものであった、—— ある率直な心のなかに残された女主人公の性格に対する評価—— だれひとりあげつらうこともなかりそうな評価—— だろうと思つて。それは本書のなかで他のいかなる事よりも多くあげつらわれていたわけなのだ。「書かざりしこそ勝りたれ」(Melius fuerat non scribere)である。しかし副題もものまにしておく。

この小説がはじめて完本として刊行されたのは、一八九一年十一月の三巻物としてであった。

一九一二年三月

T・H・

局面一 乙 女

一

五月も末のある夕方のこと、一人の中年男が、ジャストンから、隣り合うブレイクモア——別名ブラックムーア——の谷あいの、マローット村をさして、家路をたどっていた。その両脚はよろめきがちで、足どりに曲りぐせがあり、とかく一本の直線から左へ左へとそれたがる。べつにこれといって考えことをしているわけでもないのに、ある意見に合点でもするやうに、ときどきこっくりこっくりうなずきながら。片手にはからっぽの卵の籠をぶらさげている。帽子のにこ毛はけば立ち、その縁の、脱ぐときに親指のあたるところはすり切れていた。

まもなく向うから、かなりの年配の牧師が、灰色の牝馬にまたがり、とりとめもない一節の鼻唄をうたいながらやって来るのに出くわした。「お晩です」と、籠を持った男が声をかけた。「ああ、今晩は、ジョン卿かい」と牧師がいった。

徒歩の男は二足三足進んだが、立ちどまってふりかえった。

「なあ、旦那、ご無礼ですけど、この前の市の日に、ちょうどいま時分、この路でお会いして

わしが『お晩です』というたら、旦那はいまみてえに、『ああ、今晩は、ジョン卿』と返事をなさっただ」

「そうだったね」と牧師はいった。

「それから、その前にも一度——一月ほど前にな」

「そういつたかもしれないね」

「するてえとこのわしが、相もかわらぬし、がねえ仲使い風情のジャック・ダーベイフィールドなのに、なんでもなんでも『ジョン卿』と呼びなされるな、いったいどういふわけなんだ？」

牧師は馬を一、二歩近づけた。

「ほんの気まぐれさ」と、牧師はいったが、ちよつとためらったあけく、「いや、じつはね、この州の新しい歴史を編むために、ほうほうの家系図をあさっている最中に、このあいだある発見をしたんだよ。それがもとなんだ。わたしはスタッグフット小路に住んでいる故実家のトリングム牧師だがね。ダーベイフィールドや、自分が騎士づくめの旧家のダーバヴィル家直系のあとつぎであることを、おまえはほんとうに知らないのかい？『バトル僧院古書巻』によつても明らかのように、この一族は征服王ウィリアムに従つて、ノルマンディから渡つて来たかの有名な騎士、ベイガン・ダーバヴィル卿に源を発しているのだ」

「聞いたこともねえだよ、旦那！」

「いや、ほんとうなんだ。ちよつと顎をつき出して。横顔をもつとよく見たいから。そうそう。

いささか格下げだが、まさしくダーバヴィル型の鼻と顎だわい。おまえの先祖は、エズトルマヴィラ卿が、ノルマンディでグラモーガンシヤを征服するのに加勢した十二名の騎士の一人なんだよ。おまえの家の分家は、イングランドのこの地方いたるところの領地に莊園を持つていたのだ。その家の名前は、ステイヴン王の御代の『大蔵年々留』にちゃんと載っている。ジョン王の治世のとき、その一人は莊園を、『騎士慈善団』に寄進したくらい裕福だったし、エドワード二世のころには、おまえの先祖ブライアンが、大評定につらなるために、ウェストミンスターに招かれたのだ。一家はオリヴァ・クロムウェル時代に、いささか衰えたが、たいしたことはなく、チャールズ二世時代となると、忠義のゆえをもつて『王の樞の騎士』に任命された。そう、この一家には、何代ものジョン卿が続いている。もしもナイトの称号が、準男爵みたいに世襲なら、——昔は、実際、父から子へとつたわつたものだが、——この節もそうなら、おまえはいまごろジョン卿だろうよ」

「とんでもねえこつた！」

「要するに」と、牧師は鞭でわが足を威勢よく叩いて言い切った——「イングラランドじゅうに、こういう家族はめつたにいないのだ」

「なんとまあ、いねえのかやう」と、ダーベイフィールドはいった。「それなのにわしは、この教区でもいちばんつまねえ男みてえに、年々歳々、あつちこつちとよろつき廻つてさ……

トリンガムさま、いったいわしにからまる新規な知らせは、どのくれえ前からわかっていたんだべ？」

牧師は、自分の知るかぎりでは、この由緒も世人の記憶からまったく亡び去ってしまつて、すこしも知られていないといつていいと説明した。かれ自身の調査は、その前年の春のある日に始まつたものだが、ダーバヴィル家の栄枯盛衰をたどつて、夢中になっていると、ジョンの荷車に書いてあるダーバヴィールドの名が目につき、そこからかれの父親、祖父とさかのぼつて調べてゆき、もう疑う余地のないところまで来ているのだといった。

「はじめはわたしも、こんな役にも立たないことを耳に入れておまえの心を迷わせまいと思つたんだ。だがね、人間の衝動というものは、判断の力で押え切れぬほど時には強くなることもある。おまえが何かこのことをすつと心得ているのではあるまいか、ともわたしは思つたのだ」

「そういわれてみると、なるほど、わしの家族は、ブラックムーアに住みつく前のほうが羽振りがよかつたんだと、一、二度聞かされたことがあります。ただけんど、いまは馬が一頭しかいねえのに、むかしや二頭も飼つてたくれえのことだらうと思つて、いっこう気にもしなかつた。うちにや古代もの、銀の匙が一本と、古代ものの彫りのある印形が一つありますだが、やれやれ、匙の一本と印形の一つくれえ、なん

の足になることやら？……ところがこのわしと、そのお偉いダーバヴィル家の代々とは、昔からずつと血統きだつたなどとは、いやはやとんだこんだ。曾爺さんにやかくしごとがあつて、どこの出やら、あんまり話したがらなんだちゅうが……なあ、先生さま、いまわしの一門はどこで煙を立てているんだべ？ あつて、い聞き方をすまねえけん、つまり、わしらダーバヴィル家は、どこで暮らしとるかちゅうこんですが」

「どこにも暮らしてないんだよ。州の旧家としては、断絶してしまつたのだ」

「そりやあまたあいにくな」

「そうだ。嘘を平気で書く家系年代記では、男系絶えと呼んでいることで——つまり、落ちぶれて——沈んだわけだ」

「するとわしらの一門の埋まつとるのはどこなんだ？」

「キングズビーア・サブ・グリーンヒルだよ。菩提の地下納骨所に、おまえさん方は何列にもなつて並んでいる。パーベック大理石（ドール南岸鳥籠もの）の天蓋をいただいて、おまえさん方の石像といつしよにな」

「そんなら一門の館や地所は？」

「なんにもないんだよ」

「へえ、土地もねえんですかえ」

「一つもないね。さつきも話したように、おまえの一家はたくさん分家からできていたので、昔は領地も多かつたんだが、いまはかたなしさ。

この州ではキングズビーアに一屋敷あつたし、シャアトンにもう一つ、ミルポンドにもう一つ、ラルステッドにもう一つ、ウェルブリッジにもう一つあつたのだ」

「わしらがまた元の身分になるちゅうようなことは、あるもんだべか？」

「さあ、それは何ともいえないね」

「それじゃあこのわしは、この件についてやあ何としたらよかんべ？」やあつてダーバヴィールドはそうたずねた。

「おお——なんにもないでいいよ、なんにも。

『ああ、盛者は作れたるかな』（サムエル後書）と思つて、おのれを鍛えてゆくだけさ。これは郷土史家や系図学者にとつて、いささか興味ある事実だというだけのことさ。この州の小屋住み農夫らのなかにも、おまえと同じくらしい由緒の光る旧家が五、六軒はあるんだよ。それじゃあまた」

「そんなでも、トリンガム牧師さま、こんな話が出たついでに、あと戻りしてビールを一杯つき合つてくだされたらどうだべ？ 芳醇亭にやあけつこういける生一本がありますだ——もちろん、ロリヴァ軒とまではゆきまずめえが」

「いや、ありがたいが、——まあ今晚はおあずけとしよう。ダーバヴィールド、おまえはもうだいぶきこしめしてるじゃないか」こうことばを結んだ牧師は、こんな奇妙な学のはしつたをいふらしたのは、思慮分別の足りなかつたせいではなからうかと疑いながら、馬を進め

た。

牧師が行つてしまうと、ダーベイフィールドは深い思いに沈みつゝ二、三步あるき出したが、すぐ路傍の草土手に腰をおろしてしまい、籠を前においた。二、三分たったころ、はるかかなたに一人の若者の姿が現われ、ダーベイフィールドのたどってきたのと同じ方向に歩いて来た。ダーベイフィールドはそれを見かけると、片手をさし上げた。若者は歩調を早めて近づいてきた。

「おう、若えの、この籠を持ってけろ！ ひとつ走り使えに行つて来てもらいてえだ」

幅細のうす板みたいにひよろ長い若者は、眉をひそめた。「ジョン・ダーベイフィールド、このおれに用をいつけて、『若えの』なんていうおめえは、いったいぜんたい何様だというんだ。おれの名前くれえわかつてるじゃねえか——おめえの名前をおれが知つてるとおんなじに」

「わしの名前を知つとるつて？ いんにや、知るめえ。こいつあ秘密だて——秘密なんだぞ。さあ、わしのいうことを聞いて、いまあずける手紙を持ってけろ……ところで、なあ、フレッド、おめえになら話してもかまわねえが、秘密つてのはほかでもねえ、わしは殿さまの出なんだぞ——今日の昼すぎ、つまり午後には、見つけたばかりの秘密さあね」こうすつば抜きながら、ダーベイフィールドは坐つた姿勢をくずして、ながながと土手のひなぎくの中に身を

のばした。

若者はダーベイフィールドの前に突つ立つたまま頭のとつぺんから足の爪先まで、じつと彼をながめた。

「ジョン・ダーバアヴィル卿——これがわしの身元なんだ」寝そべつたままで、男はことばをついだ。「かりに勳爵士が準男爵と同じものだとしての話だ——いや、たしかに同じもんだ。わしのこととは、のこらず歴史に書いてあるだ。おめえ、キングズビーア・サブ・グリーンヒルなんぞというところを知つとるかえ？」

「うん、知つてるときさ。グリーンヒルの市に行つたことがあるもの」

「そうか、その市の教会の下に、横になつてるのが……」

「市なんかじゃねえよ、おれのいうそこは。ともかく、おれの行つたときにや、都でなかつただ——ちんこい片目の、へんぴなしょんぼこない場所だよ」

「こら若えの、場所なんかどうだつてええ、そんなことあ今の問題じゃねえ。その教会の教会の下に、わしのご先祖さまが眠つてござらっしゃる。何百人ものご先祖さまが、何トンという重さのでっかい鉛のお棺の中で、宝石ちりばめた鎖かたびらにくるまってさ。南ウエセツクスひろしといえども、わしの一族くれえ堂々とした殿さまの遺骨を持つてゐる者は、州に一人もありやしねえだ」

「さ、さ、その籠を持って、マールロットへ行くだ。そして芳醇亭へ行つて、わしを送り届ける馬車をすぐによこせといつてくんろ。馬車の底には、ラム酒一合、小壘につめておいとけ、とな。勘定はわしのほうへつけておくだ。それがすんだら籠を持つてわしの家へ行きな。女房に、例の洗濯なんか——仕上げる必要もないゆえ——はつたらかして、みやげ話があるからわしのお帰りを待つてろ、と伝えてくんろ」

若者がうろんな様子で立つていたので、ダーベイフィールドはポケットに手をつこんで、シリング銀貨を一枚とり出した。それは慢性的に数少ない持ち合せのなかの一枚だった。

「若えのや、駄賃だぞ」

こんな立場に対する若者の評価は、これでがらりと変つた。

「ジョン卿さま、へえ、どうも。何かほかにご用は？ ジョン卿さま」

「家のものに伝えてくれねえか、晩飯には、手に入るなら、こうつと、小羊のフライ、それが駄目なら黒腸詰（豚の血と脂で作）、そいつも駄目だったら豚小腸煮がよいとな」

「へえ、ジョン卿さま」

若者が籠をとりあげて、歩き出そうとすると、村のほうからブラス・バンドの音が聞こえてきた。

「あれはなんだべ」とダーベイフィールドはいつた。「まさかわしのためじゃあるめえな？」

「女子連中のお練り祭でさあ。あんたの娘さん

も会員じゃねえですかい？」

「ほんにな。もっと偉いことを考えていたんで、すっかり忘れつつたわい。さあ、マールロットへ行つて、馬車をいいつけてもらうかの。もしかすると、わしも車で廻り道して、クラブ・ダンスを視察あそぶすかな」

若者は立ち去つた。ダーバイフィールドは夕陽を浴びながら、ひなぎくの咲きみだれた草土堤にねころんで待った。長いあいだ、人っ子ひとりその辺を通らない。青い丘々の縁にとりかこまれたなかで、聞こえてくる人間の物音といつては、あの楽隊のかすかなこだまばかりだつた。

二

マールロットの村は、前にもべたブレイクモア、別名ブラックムーアの美しい谷あいの、北東の波状丘陵地のまっただなかにある。ここは四方丘にかこまれへだてられたへんある場所として、ロンドンからの旅で四時間とはかからぬところにありながら、いまだに旅行家や風景画家の足に踏まれない部分が多いのである。

この谷となじみになるには、——夏の日照り時だけは別として——谷をとりまく丘々の頂ぎにのぼつて、そこから谷を眺めるのがいちばんよい。天候の悪い季節に、案内なしで奥まった隅々に入りこむと、せまい曲がりくねつた泥んこ道で、とかく悩まされがちだからである。

野畑がけつてとび色になることなく、いつ

も青々として、泉の涸れたためしのない地味ゆたかな丘陵のこの土地は、ハンブルドン・ヒルとか、ブルバロウの塚とか、ネットルチーム円丘とか、ドッグベリイとか、ハイ・ストイとか、パップ丘とかの隆起をかき抱いているくつきりきわ立つ白亜質の尾根によつて南をかざられて

いる。海岸からの旅人は、石灰質の丘陵や麦畑を、二十マイルも北へとぼとぼと歩いたあげく、突然こうした急斜面の端れにたどりつき、いま通りすぎて来た地方とは、がらりと趣のちがう国が、眼下に一枚の地図のようにくりひろがるのを見て、びっくりしたり、大喜びしたりする。かれの後方には低い丘々が開けていて、日の照りつける広野はあくまでもひろく、その遠景一帯にさえぎるものもない大らかさを与えている。

小径は白く、野を仕切る生け垣の並木は低く刈りこまれて、大気は何の色をも帯びていない。この谷あいでは、世界は、よそよりずつと細かく精妙な縮尺で建設されているように見え、野原もほんの小畑と見まごうほど、とても寸づまりに見え。この高みからでは、野を区切る生け垣の並木も、うす緑の草原の上にひろげられた濃みどりの網模様のように。脚下にひろげられている大気はものうげに、ひどく青味がかつていたので、絵かき連中が中景と呼びならわすあたりも、おんなじ色に染まっていた。しかしその向うの水平線は、いとも濃い群青色を呈している。耕した畑地は僅かで、限られている。ごくさやかな例外はあるけれども、まずざつ

と見はるかした眺めは、大型の丘と谷の群れの内側の、小型の丘と谷の群れを、すつぱりと蔽っている草と木々のゆたかな大幅のかたまり、とてもいったらよからうか。そんなのがブラックムーアの谷なのだ。

この地域は、地形上の興味におとることなく、歴史的な興味にも充ちている。昔この谷は、ヘンリー三世の御代のふしぎな伝説にもとづいて、「白い牡鹿の森」として知られていた。その王が追いつめていったん逃がしてやった美しい牡鹿を、トマス・ド・ラ・リンドなる者が殺してしまつたかどで、重い罰金をこれに課したという伝説なのだ。そのころは、いや、比較的近年までも、この地方は密林に蔽われていた。山腹に生き残っている古い樫の木立や不規則な森の帯や、数知れぬ牧草地に木影を投げている幹のうつろな老木などに、今でも、そうした昔の状態の名残りは見出だされるはずだ。

そういう森林は姿を消してしまつたが、その森かげでおこなわれた古い風習のいくつかは残っている。しかしそのおおかたは、変わり果てた形で、あるいは偽装された形で余命を保っているにすぎない。たとえば、古い「五月朔祭の踊」が、さきに話した午後、あのクラブ祭——土地の呼び名にしたがえば、「クラブのお練り祭」というもののなかに、身をやつしているのが認められるはずだった。

クラブのお練り祭は、マールロット村の若手の住民たちにとっては興味ふかい行事だった。も

つともその本當の興味は、儀式に加わる人に気づかれてはなかったが。——その変わった点は、毎年の記念日に行列を作つて練り歩いたあげくダンスをするという習慣を保っていることよりも、會員が女ばかりに限られていたことだった。男のクラブだと、このような祝いごとは、だんだんさびれてゆくといふものの、さほど珍しいわけではない。しかし女性の持ち前の内気さのためか、男性の親戚側から面當がましい態度を示されるためか、まだ残っている女のクラブ（ほかに残っているとして話だが）も、あの昔日の光彩と極致の興趣を失つてしまつてゐた。ただひとりマローットのクラブだけは生きながらえて、地方的な「大地女神祭」を維持しているのだった。共済組合の組織としてではないにせよ、何かを奉納する女たちの信徒団のようなものとして、それは数百年このかた、年ごとのお練りをつづけてきたし、今日もお練りをやるのであった。

隊を組んだ女たちは、ひとり残らずまっ白な長上衣を着てゐた。この白ずくめは、朗らかなたのしさといえは、五月どきを意味した旧暦の時代（イギリスで新暦に切りかえたのは一七五二年）——すなわち、遠い先さぎのことをおもふばかりの習わしが、まだ、歡喜悲哀の情を一本調子な平均律にまで切り下げてしまわなかつた時代——から生きながらえているいとも朗らかな衣裳だった。女たちは、まず顔見せに、二列に並んだ行列で教区を練り歩いた。緑の生け垣やつたのからむ家の正面を背に、女たちの姿が太陽にばつと照らし出されるたびごとに、理想と現実とはいささか衝突し合つた。というのは、全會員お揃いの白装束といふものの、同じ白さの白衣がそのなかに二つと揃つてはゐなかつたからである。晒の純白に近いものもあれば、青みがかった白もあり、何年も何年もたたんだまましまひこまれていたせいか、年寄連の羽織つてゐるものの中には、屍の肌の色にかたむいてゐるものもあり、またジョージ王朝（一七三〇—一七六〇）風な旧式の仕立てにかたむいたものもあった。

白い衣裳のけさやかさに加えて、どの女も娘も、右手には皮をはぎとつた柳の白い小枝を、左手には白い色の花を束ねてたずさえていた。柳の皮をはぐのと、花を選ぶのとは、めいめいで心がけねばならぬ仕事だった。

行列の中には、中年の婦人や初老の女もいくたりかまじつてゐる。そうした人たちの、銀の針金のような髪の毛や、歳月と労苦にいためつけられて、皺をたたんだ顔つきは、こんな陽気な羽目に立たされると、ほとんど怪奇な姿ともみえ、あわれをもよおす眺めともみえた。おそろく、本當をいへば、「こんな遊びなんていっこうおもしろくもない」というつぶやきをももらしてもいい年配に近づいてゐるような、心労をかさね、經驗を積んだ女連にこそ、若い娘たちにくらべて、どれほど多くの、集めて語るべき話のたねが秘められてゐることであらう。しかしここでは、年とつたほうは割愛して、胸下着

のかげで速く暖かい、のちのときめいてゐる娘たちに、目を向けることにしよう。

事実、うら若い娘たちが、この一群れの大多数を占めていた。その豊かな髪の毛は陽光に照りはえて、金色に、黒に、とび色に、さまざまな色合いを織りなしている。瞳の美しい者、鼻の恰好のいい者、口もとや、姿の美しい者など、さまざまだが、そのすべてをかね具えている娘となると、まあいまいといつてよかつた。物見高い人目に、こうもむくつけくさらされては、澄ました口つきをしていることもむづかしかつたり、頭の平衡を保つこともできかねたり、自分の容貌から自意識をとりのぞくこともできなかつたりするふしが目立って、彼女らが、人目に慣れていないずぶの田舎娘ばかりだというのがすぐわかつた。

娘たちは、それぞれみんな、外側から太陽に暖められていたが、ちやうどそのように、魂の日なたぼつこのでできるような、ちいさい太陽を、めいめいのうちにこっそり持つていた——夢とか、愛情とか、趣味とか、すくなくともなにかぼんやりした遠い希望とかを。——希望なら、飢え細つて絶えだえになりながら、なお命脈をたもつ希望でもよかつた。希望なんて、とかくそうしたもののだ。そういうわけで、彼女らはみんな朗らかで、その多くは楽しげだった。

行列は「芳醇亭」のそばにさしかかると、街道からそれてくぐり門を抜け、草地に入つて行った。そのとき女連の一人がいった——

「あれ、まあ！ テス・ダーベイフィールド。馬車で家さ帰って行くのは、おめえのおとつあんでねえかよ！」

この叫び声に、一行のなかの若い一人が顔をふり向けた。それは品よくこぎれいな娘だった。ほかにもこぎれいな娘がないわけではなかったが、この子の、動きに富んだ牡丹にまごう口もとと、ぱっちりしたあどけない眼は、肌の色にも顔かたちにも、ゆたかな表情を添えていた。髪には赤いリボンをつけている。このような目立った飾りを誇りうる者は、白ひと色の同勢のなかで、ひとりこの娘だけであった。ふりむいてみると、ダーベイフィールドが、芳醇亭なえつけの二輪馬車におさまって、街道をやつて来るのがみえた。御者は、上衣の袖を肘までたくしあげたちぢれ毛のたくましい娘だ。これはその旅籠の朗らかな女中で、下働きの役目にふさわしく、時には馬丁にもなれば、また馬の世話係にもなるのだった。車上にふんぞりかえったダーベイフィールドは、気持よさそうに両眼をつぶって、頭の上に片手をふり廻しながら、ゆっくりした朗詠調で歌つてゆく――

「わしは――キングズビアに――どえらい――菩提の地下納骨堂を――持つとるぞ――さてそこの――鉛造りのお棺の――なかにや――騎士づくめの――先祖代々が――おられるぞ！」

クラブの会員たちは、さっきテスと呼ばれた娘を除いて、みなくすくす笑った。自分の父親が、一同の笑いものになっているのを見て、テ

スの胸中には、怒りが次第に高まってゆくらしかった。

「お父さんはくたびれているんだわ。それだけのことだわ」と、テスはせかせかしていった。

「うちの馬はやすませなくちゃいけないので、家まで乗せてもらつてのよ」

「知らぬが仏だわ、テス」と仲間はいった。

「市のあとの深酒が入ったのさ。おほほ！」

「よしよ。お父さんのことで冗談いうんならもう一步もあんなたちといつしよに歩かないから！」とテスは叫んだ。頬の赤らみが、顔じゅう一面に、それから首までひろがった。たちまち両の眼はうるみ、まなざしは力なく地上におちた。自分たちが、ほんとうにテスを傷つけたことがわくと、仲間の者はもうそれ以上何も

いわず、行列はまたもとどおり一糸みだれぬさまに戻った。父がなぜあんなまねをするのか、わけがあるなら魂胆を知りたいと思つたが、テスの自尊心は二度と彼女をふり返らせなかった。

こうして彼女はみんなといっしょに、芝生の上でダンスのおこなわれる生け垣で仕切られた原っぱへと歩いて行つた。そこへ行きつくまでに

は、テスも心の落ちつきをとりかえし、隣の者を枝でかくくぶつたりして、いつものとおりに口をきいていた。

この年頃のテス・ダーベイフィールドは、ただ喜怒哀楽を入れる器といつてよく、みじんも経験の色に染んではいなかった。村の学校は出たものの、彼女のことばにはいくらか方言がま

じつていた。この地域一帯にわたる方言の音調

上の特色は、**□**の綴りで示される発声にはほ近い音で、おそらく人間の話すことばとして、これほどゆたかな発音は、ほかにないだろうと思

われる。郷土特有のこの音節を口に出すために、テスがふつくとがらせるまっ赤な唇は、まだ本来の形に落ちつかず、ことば一つが終つて、

両の唇が閉じ合う際には、下唇のはうが上唇の中央を押し上げるような恰好になるのであった。

彼女の顔つきには、まだ幼女時代の面ざしがひそんでいた。この日歩いて行く彼女の姿は、はつらつとしてこぎれいで、もうりっぱな女一人前なのだが、それにもかかわらず、ときおりその頬には十二歳の彼女が、またその瞳には九歳の彼女が、顔をのぞかせていた。いや、その口もとの曲線のあたりに、五歳のテスときどきちらちらすることさえあった。

しかしこうしたことには気づく者はきわめてすくなく、思いめぐらす者はさらにすくなかった。まれに二、三のひとが――それもおもに異郷から来た旅人が、ふと通りすがりにテスを見かけ、そのさわやかさにしばし見とれて、こんな子にまたと会えようか、と驚くことはあった。しかし、たいいていの人には、彼女は品のいい絵のよ

うな田舎娘にとどまり、それ以上に出はしなかった。

女馬丁が手綱をさばく馬車に、凱旋將軍のようにおさまり返つたダーベイフィールドについて、はもう何にも見えもせず、聞こえもしなかつ

た。そしてクラブの一行が所定の広場に入ると、ダンスがはじまった。なにしろこの仲間には男がいないので、はじめのうちは女同士で踊ったが、一日の労働の終わる時間が近づくにつれて、村の若者たちは、ほかの暇人や行きずりの旅人たちといっしょに、そのまわりに集まって来て、踊り相手を求める声がかかるのを、待ち受けているらしく見えた。

こうした見物人のなかに、毛並み卑しからぬ三人の青年がいた。小さな背囊（せふさう）をかついで、頑丈なステッキを持っていて。三人ともよく似ていて、年も一つ、二つの違いらしく、誰の目にも兄弟だろうと思われたが、事実そのとおりだった。いちばん年かきの兄は、正式の副牧師用の詰め襟のチョッキに白ネクタイをつけ、つばのせまい帽子をかぶっている。二番目はふつうの大学生だ。三番目の、つまり末の弟は、外から見ただけでは、まだ特徴というほどのものもなく、目つきと服装になんの拘束も受けぬのびのびとした様子の見られるところから、まだ職業という定石にはまらかけてもいないと思われる。予言してもいいことは、この青年が、なんでもかでも広く浅くとりとめもなくかじっている学生だということだけであった。

三人の兄弟は、聖霊降臨節の春休みを、ブラツクムーアの谷を抜ける徒歩旅行で過ごそうとしているところで、コースは北東のシャストンの町から、西南へと取るつもりだと、袖ふれ合った行きずり人に話していた。

かれらは道のそばの門によりかかって、この踊りと白装束のおとめたちが、何を意味しているかについて、質問もした。上の二人はどうみても、ほんのしばらく立ちどまっただけで、長居をするつもりもないらしくったが、末の弟のほうは、男の相手もなく踊っている少女の群れをみると興味を感じたらしく、べつに先を急ごうとはしなかった。かれは背囊をはずして杖といっしょに生け垣の土手におくと、門をあけた。「エンジェル、お前は何をしようというんだ？」と長兄がいった。

「入って行って、あの人たちと踊りたいんですよ。みんなで行っちゃいけないの？ ほんの一、二分間——ひどく手間どるわけでもなし」
「だめ、だめ。冗談じゃない！」と長兄はいった。「田舎のおてんば娘といっしょになつて、人前で踊るなんて、人に見られたらどうするんだ。さあ、行こう。さもないと、スタウアカスルに着くまでに暗くなってしまう。途中に泊まる所はないんだよ。おまけに、寝る前に『不可知説排撃論』をもう一章みんなで読み合わなくちゃならないんだぜ。せっかく苦勞して、ぼくがこの本を持って来たからにはね」

「わかつてますよ——五分もしたら兄さんとカスパート兄さんに追いつくから、先へ行ってください。約束するから、ねえ、フェリックス」

二人はししぶ弟をあとに残し、追いつきやすいように、弟の背囊を持って出かけた。弟は

野原に入った。

ダンスがひとしきりすむやいなや、彼はすぐ近くの二、三の少女に、いんぎんに声をかけた。「どうもお生憎ですね。あなた方の相手はどこにいるんです？」

「まだ仕事がすまねえんだもの」と、もともと大胆な一人が答えた。「もうやって来るでしようけど、それまで、あんたの相手をしてもらえませんか？」

「いいですとも。だけどこんなに大勢にぼく一人じゃねえ！」

「だってないよりはましだもの。抱いたりかかえられたり一つもせず、女同士面つき合わせて踊るなんて、ほんとにしよ、むない仕事なんだもの。さあ、選り出してちょうだい」

「しーっ、あんまり厚かましいわよ！」と、内気なほうの娘がいった。

こうして誘われるままに、青年は娘たちを見まわし、どこか目星をつけようところろみたが、どれもこれも新顔なので、うまく区別もつきかねた。かれはいちばんそばの者を手当り次第えらんだが、その娘は、自分にお鉢がまわりそうだと思っていた最初の話し手でもなく、またテス・ダーベイフィールドでもなかった。系図も先祖代々の遺骨も、石に刻まれた碑文も、ダーバヴィル家の顔立ちも、まだテスを助けて彼女の人生の戦いを有利にみちびきはしなかった。たかが踊り相手の視線を、いともありふれた農民づれの頭上を越えて、彼女のほうへとひきつ